

I 問題の所在

〔『列朝制度』(天和3(1683)年)卷之四(1,2)の進んだ耕作技術・重い公租・藩専売作物の耕作強制・不要役職と接待と賄賂の増加 → サツマイモ作とサツマイモ食の普及 → 畑面積の拡大 → 耕地拡大に追いつかない耕作技術と人口 → 低い耕地利用率・不作付地の増加 → 農業生産力の停滞〕の流れを、近世と近代の資料を使って説明した後、薩摩藩領における近世から近代に至る耕作技術停滞の理由を探る。

朝河貫一は、中世南九州の営農の実態を明らかにするための資料である『入来文書』(3)を翻刻した。『入来文書』が記述する中世の田は小規模河川沿いや山腹の棚田が多かった。

秀村選三(4)は、土地に根ざし、生活に密着した歴史を究明するために、薩摩藩を日本の「西南辺境型藩領国」の典型に位置付けて、大隅半島高山郷の郷士である守屋家における営農形態と従属労働者(下人・奉公人)の生活実態を明らかにすべく、微視的研究をおこなった(前掲(4)4~6頁)。秀村は近世薩摩藩領に関わる諸研究業績を各人の研究視点を整理して紹介しており、発表者は秀村の記述は妥当であると考えてるので、ここでは繰り返さない。秀村の著書の該当箇所を参照されたい(前掲(4)7~22頁)。

原口虎雄は、『列朝制度』(1)『農業法』(5)など近世薩摩藩領の諸史料と、『鹿児島県農事調査』(6)などの近代資料を多数翻刻し、近世の薩摩藩領に生きた人々の暮らしの実態を明らかにする作業をおこなった。『日本農業発達史』別巻上に薩摩藩領の農耕技術研究の視点を適格に記述している。

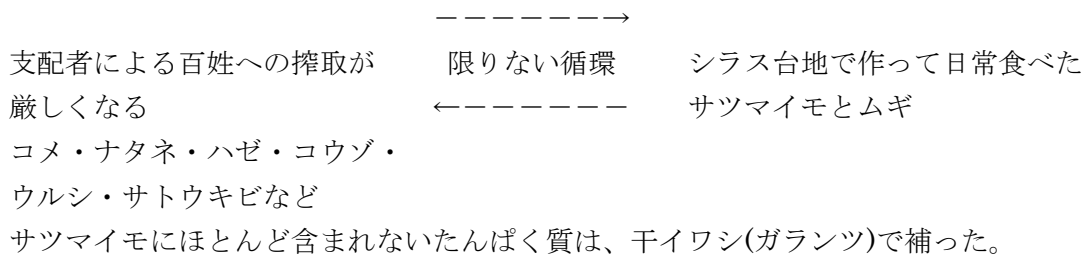
芳即正は薩摩国谷山郷『名越家耕作日記』を資料を使って、薩摩藩領西目(先進地)の耕作技術を復原する作業をおこなっている(7)。

桐野利彦は、現地調査にもとづいて地域の個性を明らかにする地理学の視点から、大隅半島笠野原台地における近世の開発過程などの研究を蓄積し、その一端を『鹿児島県の歴史地理学的研究』(8)に集約している。

鈴木公は地理学の立場から近世薩摩藩領村落立地と近代以降の変化を明らかにし、その成果として『鹿児島県における麓・野町・浦町の地理学的研究』(9)を著作している。

II 作業仮説

行政と徴税システムを根拠にする歴史学者の見解と、旧薩摩藩領の百姓であった曾祖父の暮らしぶりの「ずれ」を、矛盾なく結びつけるのが、近世半ば以降のサツマイモ作とサツマイモ食の普及による日常の食料事情の好転である。支配者による搾取が厳しくなってきた頃に、サツマイモ作が普及して、日常食材が確保された。



搾取で貯めた資金とサツマイモの扶養力が、明治維新のエネルギーを生み出した。

III 『列朝制度』卷之四 農業」の耕作技術

『列朝制度』を編集した3人(禰寝清雄・菱刈孫兵衛・汾陽次郎右衛門)は、いずれも薩摩藩の農政担当役人であり、商品作物栽培の奨励や、新田開発をおこなった。3人の履歴は、原口虎雄の『農業法』解題に記述されている(前掲(5) 268~270頁)。

『列朝制度』卷之四 農業」の記述内容は、稲(翻刻1~5頁)と麦(翻刻5~6頁)と粟(翻刻6頁)と百姓の日常食材(翻刻9~10頁)に限られる(前掲(5) 271~272頁)。

『列朝制度』卷之四 農業」に麦粥の調理手順(翻刻9頁)が記述されているのは(前掲(1) 133頁)、公租が重くて、麦が主食材のひとつだったからである。

重い公租の例。粃高1石の公租はすべて込みで4斗1合、『感傷雜記』(伊東祐伴、(10))では5斗2合(B)ぐらいが実状であった。粃1石を摺ると、玄米5斗5升(A)になる。A-B=4升8合(Aの9%)の玄米が百姓の食用に残るのみ。原口は『農業法』の解題に「農民はほとんど全余剰を租税として収奪されていたという事情がある。(中略)『列朝制度』卷四農業の末尾に、農民常食の在り様を教諭しているのは、劣弱な米穀生産のうちから租納部分に農民食糧部分が食い込むのを予防する配慮からであろう。」(前掲(5) 272頁)と記述している。

『日本農書全集』34に収録されている『農業法』は、『列朝制度』卷之四 農業」の農業技術を原型とする(前掲(5) 283頁)。

『列朝制度』卷之四 農業」が記述する耕作技術と百姓屋敷内の各建物配置は、同時期の三河国の農書『百姓伝記』(1681~3年)(11)や岩代国の農書『会津農書』(1684年)(12)とほぼ一致する。

IV 近世後半の耕作技術

近世後半の薩摩藩領は[重い公租 → 藩専売作物の耕作強制 → サツマイモ作とサツマイモ食の普及 → 畑面積の拡大 → 耕地拡大に追いつかない耕作技術と人口 → 低い耕地利用率・不作付地の増加 → 農業生産力の停滞]に陥っていた。

1783(天明3)年に薩摩藩領を旅行した橋南谿の『西遊記』((13)、67・206頁)と古川古松軒の『西遊雜記』((14)、102頁)にサツマイモ(から芋)を食べた記述がある。

『薩藩経緯記』(佐藤信淵、(15))・・・殖産指導書

『耕作萬之覚』(薩摩国谷山郷の名越高朗、(16))と『耕作日記』(大隅国高山郷の守屋舎人、(17))は両地区における最高の技術水準の営農例である(18)。

V 近代の耕作技術

『鹿児島県農事調査』(6)

『薩摩見聞記』(本富安四郎、(19))、『薩摩国滞在記』(シュワルツ、(20))

近世以来の地主-小作人(旧郷士-門百姓)構造の下で、耕作意欲は低迷状態が続き、耕地利用と作物生産は向上しなかった。20世紀前半の耕地利用率の上昇は、緑肥作物(青刈大豆・レンゲなど)作の普及による。

1902(明治35)~23(大正12)年の『村是』(村政要覧)(21)から1人当り主食材の消費量

を推定できる。次に3事例を記載する。

郡村名	年	単位	粳米	裸麦	大麦	小麦	粟	蕎麦	甘藷	合計
鹿児島郡	1902	1日(合)	0.9	—	0.23	0	0.1	—	6.8	8.03
西桜島村		1年(石)	0.329	—	0.284	0.005	0.002	—	2.495	2.915
日置郡	1902	1日(合)	1.523	0.677	—	0.134	0.562	0	8.333	11.22
伊作村		1年(石)	0.556	0.247	—	0.049	0.205	0.8	3.042	4.179
始良郡	1902	1日(合)	2.444	0.329	—	0.296	0.811	0.077	2.466	6.423
蒲生村		1年(石)	0.892	0.12	—	0.108	0.296	0.028	0.9	2.344

鹿児島市原良町枯木迫の土地利用変化・・・1902年、1966年、1990年作成の地形図と写真で説明する。古川古松軒『西遊雑記』の記述(前掲(13)、91頁)。1951(昭和26)年のルース台風復興住宅を建設するために、棚田の大半が宅地に転用された。

今後は、明治期に作成された地籍図と地籍帳を使って、近代初期の土地利用を復原する作業をおこないたい。

VI まとめ

農民への過重な公租負担(高い課税率と藩専売作物の作付強制と不要役職の増加と接待回数増加と賄賂の横行による費用負担の増加) → 不課税地の畑で新来作物のサツマイモを作って主食にする → 人口増加 → 耕地面積の拡大 → 単位面積当たり投下労働力量の減少 → 粗放的耕地利用 → 耕作技術停滞 → 課税地での生産量減少 → 耕地面積の拡大で対応(ここからは悪循環) → 結局近世～近代を通して、薩摩藩領の耕作技術は上がらず、その結果である農業生産力も停滞する状況が続いた。

[重い公租・藩専売作物の作付強制・不要役職の増加・接待の費用負担・地主-小作人関係]が農民の労働意欲を削ぎ、進んだ耕作技術が浸透する素地は構築されなかった。この状況は、20世紀中頃に農地改革が実施されて、大半の農民が自作農になって、はじめて克服された。旧薩摩藩領では、農地改革による農民の生産意欲向上が顕著であった。

『列朝制度』(天和3(1683)年)巻之四の翻刻・現代語訳・解題作成は、「耕作技術を指標にする近世～近代旧薩摩藩領の地域性究明」をおこなう第一歩の作業である。旧薩摩藩領で著作された日記や耕作記録類の所在をご存じの方に、ご教示を乞いたい。

1. 石井良助編(1969)『藩法集Ⅷ 鹿児島藩上』(原口虎雄翻刻)、創文社、955頁。
2. 筆写者未詳(1937)『列朝制度 巻之四』(都城本)43～65丁。
3. 朝河貫一原編(1967)『入来文書 新訂』日本学術振興会、323頁。
4. 秀村選三(2004)『幕末期薩摩藩の農業と社会』創文社、685頁。
5. 汾陽四郎兵衛(年代未詳)『農業法』。(原口虎雄翻刻、1983、『日本農書全集』34、農山漁村文化協会、243～262頁、同解題、264～287頁)。
6. 原口虎雄編(1980)『鹿児島県農事調査』巖南堂書店、612頁。
7. 芳即正(1953)「近世末期薩摩藩の農業技術と経営-名越家「耕作萬之覚」を中心として-」社会経済史学 18-5、51～69頁。
8. 桐野利彦(1988)『鹿児島県の歴史地理学的研究』徳田屋書店、517頁。

9. 鈴木公(1970)『鹿児島県における麓・野町・浦町の研究』自費出版、163頁。
10. 伊東祐伴(1830年代?)『感傷雜記』。(秀村選三翻刻、1993、「久留米大学比較文化研究所紀要」14、1～71頁)。
11. 著者未詳(1681～83)『百姓伝記』。(岡光男翻刻、1979、『日本農書全集』16、農山漁村文化協会、3～335頁、同解17、3～336頁)。
12. 佐瀬与次右衛門(1684)『会津農書』。(庄司吉之助翻刻、1982、『日本農書全集』19、農山漁村文化協会、3～218頁)。
13. 橘南谿(1795-8)『西遊記』。(宗政五十緒校注、1974、『東西遊記』2(『東洋文庫』249)平凡社、260頁)。
14. 古川古松軒(1783)『西遊雜記』。(本庄栄治郎ほか編、1927、(『近世社会経済叢書』9)改造社、1-198頁)。
15. 佐藤信淵(1834)『薩藩経緯記』(佐藤信淵家学全集中巻、岩波書店、671～704頁)。
16. 名越高朗(1865～1876)『耕作萬之覚』。(芳即正翻刻、1970、『田植に関する習俗』5、文化庁文化財保護部、324～345頁)。
17. 守屋舎人(1864)『耕作日記』。(秀村選三翻刻、1999、『日本農書全集』44、農山漁村文化協会、193～262頁)。
18. 有菌正一郎(1985)「19世紀中頃の農事記録にみる南九州の土地利用方式」地理学評論58、789～806頁。(有菌正一郎(1986)『近世農書の地理学的研究』第5章第1節所収、249～274頁)。
19. 本富安四郎(1898)『薩摩見聞記』(原口虎雄翻刻、1971、『日本庶民生活史料集成』12世相1、三一書房、353～423頁)。
20. H. B. シュワルツ著、島津久大・長岡祥三訳(1984)『薩摩国滞在記—宣教師の見た明治の日本—』新人物往来社、180頁。
21. 一橋経済研究所附属日本経済統計情報センター編(1999)『郡是・町村是資料マイクロ版集成』。丸善出版事業部。